

25

制作会社を選ぶときのポイントや、
うまく付き合うためのポイントを教えてください。

●社史のノウハウがあることが第一条件です。

当社は「社史制作は誰にでもできるものではない」とは考えていません。本書をお読みただければわかるように、作業の要諦は「5W+3H」など日常業務におけるそれと大差はありません。ただ、社史には社史なりのルールがあり、また陥りやすい陥穽もあるので、すべて自前で進めようとすれば、それなりの試行錯誤を覚悟しなければなりません。

その意味で、制作会社を利用する第一の理由は、社内に社史についての経験がとほしから、上手にリードしてくれる相手が必要とするということではないでしょうか。だとすれば、制作会社を選ぶ第一の条件は、社史についての経験が豊富であるということになります。経験が豊富だというのは、その会社がそれだけ実績を積んでいるということです。ある会社が制作会社を使って社史をつくった。その社史の出来が良かったので、顧客会社が別の会社に紹介した、あるいは社史を見た別の会社がその制作会社に依頼した。そのような積み重ねで経験が豊富になっていきます。

また、経験が豊富だということは、「失敗もたくさん経験してきた」ということを意味します。どのような制作会社も、初めから完璧というわけにはいきません。しかし失敗の経験は必ず次に活かしていくわけで、ある意味では制作会社に依頼するのは「失敗の経験も買う」ということだとも思います。

-
- ・社史についての制作キャリアがある。
ノウハウが体系化できている。
 - ・見積の細目についてきちんと説明ができ、コスト管理についてのノウハウがある。
 - ・契約書を用意している。
 - ・書籍印刷についての管理が行き届く。
 - ・わが社の社風に合う（社風を理解してくれる）。
 - ・社史を執筆するライターを豊富にもっており、ライター管理も行き届いている。
-

▲ 外注先を選ぶときのポイント

次に「見積書の細目について明快に説明できる」「契約書に類するものを用意している」ことも条件です。社史編纂のサービスも、制作会社と依頼主のあいだのビジネスですから、費用とサービス内容の関係が明確でなければなりません。社史編纂は時間がかかるので、途中で仕様が変更することも多く、その際に最初のスタート点が明確でないとトラブルになりやすいのです。

制作会社とうまく付き合うためのコツですが、これもとりたてて特殊なものはありません。社史編纂のお手伝いは物品の販売とは違って、ソフト面のサービスの提供ですから、できるだけ相性のよい相手を選ぶことをおすすめします。後は、制作会社を有効に活用するには、「どうやって知恵や経験を引き出すか」ということに留意されればよいでしょう。